

「読み」の可能性——本田一弘

角川「短歌」の七月号で『読み』の重要性という特集が組まれていた。その中でも特に吉川宏志の「他者に触れる読み」という文章が示唆に富んでいた。吉川は、歌を読む際に作品の中に自分の経験したことや感じたことと同じものを探すだけではなく、自分と他人の感性、言語感覚、価値観の差異に敏感になり積極的に触れようとしている。読みの本質を鋭く言い当てた好論である。また、同じ時代に生きる他者の考えに興味をもつことが新しい歌を理解する鍵になると説く川野里子の「同じ時代を生きている」という文章も共感しつつ読んだ。

・床の上積まれた本の間から／流れ始める／夕暮れの風

横浜翠嵐高校二年 畑 勇人

八月二十九、三十日と盛岡で行われた第九回全国高校生短歌大会「短歌甲子園2014」の審査員を今回初めて務めた。今までは芸能部の顧問として勤務校の生徒を連れて何度か出場してきたのだが、今度は逆に審査する立場として、たくさんの高校生の歌を読みながら、あらためて歌の「読み」について考えさせられた。

右の歌は特別審査員の小島ゆかりが賞に選んだ歌であるが、本の「間」に視線を注ぐ感性と繊細な言語感覚によって夕暮れの静謐な時間が歌われており完成度が高い。この一首をはじめとして吉川、川野の言葉を借りて言えば、「同じ時代を生きている」高

校生という「他者」の作品を彼ら彼女らの感性、言語感覚そして価値観に触れながら共感しつつ読むことのできた二日間だった。しかし、その「読み」を深める時間がなかったのが憾まる。ある題の下に両校から一首ずつ出され、作品に関して簡単な質疑の後、五人の審査員は赤か白かどちらかのボタンを押さなければならぬ。古来行われてきた歌合と違つて「持」はない。最初のうちは事前に資料が渡され、ある程度考へる時間があつたのだが、決勝トーナメント、準決勝、決勝と上位の試合になると直前に資料が渡され短時間のうちに歌の優劣を下さなくてはならない。ふだんの歌会では味わえないスリリングな出来事であった。自分が今まで経験した歌会だと無記名の作品が印刷された資料をもとにじっくりと読み、その中から複数の歌を選び、多く票が集まつた歌について主に歌の良い点について議論されることが多かつた。

今回「短歌甲子園」の審査をしてみて、例えは歌会で二首の優劣を時間をかけてじっくりと議論するようなことがあつたらかなり面白いと思った。「心の花」で言えば、佐佐木幸綱、伊藤一彦、谷岡亜紀、大口玲子たちがこの歌のどこが良くてなぜ選んだのか、別の歌のどこが悪くてなぜ選ばなかつたのかについて議論する。読みの現場における判詞を聞いてみたい。時間の制約もあるだろう。もちろん毎回、歌合形式だとそれはそれでマンネリズムに陥ってしまうので、一般的な互選形式、そして歌合形式を折にふれてバランスよく組み合わせて歌会を行うのはどうか。他者に寄り添いつつ歌を読み、その歌の優劣を判断し議論を交わすことによつて、主体的な「読み」を促し、各自の「読み」の可能性が広がる一つの契機になるのではないかと思つたが、どうだろうか。